

「冷戦」の語り方と地域冷戦論

～ウェスタッドのワールド・ヒストリー、ルーチの複数の地域冷戦、
そしてヨーロッパ冷戦史～

山 本 健

はじめに

冷戦が終結したとされてから30年以上が経つ。その間に冷戦史研究も著しく発展した。一次史料の開示によって多くの事実が明らかになると共に、「冷戦史」が取り扱う国・地域はグローバルに拡大し、扱うテーマもいっそう多面的なものとなった。そのような研究状況を踏まえた時、「冷戦」はいかに語りうるのだろうか。その「語り方」に焦点を当てて議論を深めることは大いに意味があるだろう。

本稿はその一助として、ヨーロッパ地域に焦点を絞りながら、冷戦史研究の今日における到達点と地域冷戦について論じることとする。本稿ではまず、迂遠ながら冷戦史研究の発展を概観する。次に、通史的な冷戦史の金字塔とも言える近年刊行された二冊の大著、すなわちオッド・アルネ・ウェスタッドの *The Cold War: A World History* (Basic Books, 2017) (邦訳：『冷戦—ワールド・ヒストリー』岩波書店、2020年) と、ローレンツ・ルーチの *Cold Wars: Asia, the Middle East, Europe* (Cambridge University Press, 2020) を取り上げ、その語り方を比較する。特に本報告との関連で、ルーチの地域冷戦論（あるいは、そのタイトルが示すように「複数の冷戦」論）に注目する。合わせて、ウェスタッドとルーチがそれぞれの冷戦論の中で、ヨーロッパについてどのように語っているのかを分析する。さらに、地域冷戦をどのように語るのかについて、若干の理論的考察を試みる。最後に、自著の『ヨーロッパ冷戦史』（ちくま新書、2021年）に依拠して、ヨーロッパ地域冷戦の語り方の一例を解説することにした。

1. 冷戦研究史

「冷戦」の語り方を論じるためにも、まずは冷戦史研究の発展を振り返り、現在地を確認しておこう。とはいえ、冷戦史研究は地理的にも扱うテーマ的もかなり肥大化してしまっている。ここでは網羅的にそれを論じるのではなく、本稿の議論に資する範囲で、もっぱらヨーロッパ地域を念頭に整理することを試みる¹。

一次史料に基づく冷戦史研究は、各国アーカイブの機密文書の開示状況に合わせて地理的に拡大していった。まずはアメリカの史料が順に開示され、アメリカ外交史としての冷戦研究が先行した。だが、1970年代後半から西ヨーロッパ諸国の史料が、国毎にかなりの濃淡はあるものの徐々に開示され、80年代以降、西ヨーロッパ諸国の冷戦政策を論じる文献が急速に増えていった²。ノルウェーの歴史家ゲア・ルンデスタッドが「招かれた帝国」というテーマを打ち出したのも、1986年のことである³。

米ソ冷戦終焉後の1990年代には東側陣営の史料を用いた研究が現れ、冷戦史研究は次の段階へと移った⁴。1991年にはウッドロー・ウィルソン・センターを拠点とする Cold War International History Project (CWIHP) が発足し、東西双方の史料を用いて冷戦を捉え直す動きが始まった。90年代

1 冷戦史に関する文献をリスト化すれば、英語文献だけに絞っても優に100頁を超える分量になる。本稿の脚注ではいくつかの代表的な文献を挙げておくが、それは網羅的なものではないことに留意されたい。くわえて、ここで取り上げていない文献が、質的に劣っていると筆者が考えているわけでは決してない点も強調しておきたい。

2 枚挙に暇がないため1990年代初頭までに発表されたいくつかの文献のみを挙げると、Peter Boyle, “The British Foreign Office View of Soviet-American Relations, 1945-6,” *Diplomatic History*, Vol.3, 1979; Sean Greenwood, “Ernest Bevin, France and ‘Western Union’, August 1945-February 1946,” *European History Quarterly*, Vol.14, 1984; John W. Young, *Britain, France and the Unity of Europe, 1945-1951*, Leicester University, 1984; Pierre Guillen, “La France et la Question de la Défense de l’Europe Occidentale, du Pacte de Bruxelles (mars 1948) au plan Pleven (octobre 1950),” *Revue d’Histoire de la Deuxième Guerre Mondiale*, n° 144, 1986; Georges-Henri Soutou, “La France, l’Allemagne et les Accords de Paris,” *Relations Internationales*, n° 52, 1987; Anne Deighton, *The Impossible Peace: Britain, the Division of Germany and the Origins of the Cold War*, Clarendon Press, 1990; Saki Dockrill, *Britain’s Policy for West German Rearmament, 1950-1955*, Cambridge, 1991.

3 Geir Lundestad, “Empire by Invitation? The United States and Western Europe, 1945-1952”, *Journal of Peace Research*, Vol. 23, No. 3, 1986.

後半には、ノースカロライナ大学出版会がThe New Cold War History シリーズの刊行を開始し、その中では中国と冷戦に関する研究も発表されていった⁵。さらに2000年にはイギリスのLSEを拠点とする学術雑誌*Cold War History*が立ち上がり、アメリカとは異なる場所から多様な視点の冷戦史が生み出されていった⁶。そして2005年、CWIHPに初期の頃から参画していたオッド・アルネ・ウェスタッドが画期となる第三世界からの冷戦史を上梓した。彼の*The Global Cold War*はバンクロフト賞を受賞し、今日の冷戦史研究のスタンダードとなるグローバルな冷戦史の礎を築いた⁷。2010年には、ウェスタッドとアメリカの冷戦史家メルヴィン・レフラーが共編者となり、ケンブリッジ大学出版会から全三巻の冷戦史論文集が刊行する。それにより、冷戦史研究の幅広さがまともった形で世に示されることになった。その数年後にはルートレッジやオックスフォード大学出版会からも競い合うようにして冷戦史を包括的に取り扱おうとする論文集が出版された⁸。それらは一様に、冷戦をグローバルなものとして捉え、様々な角度から論じることを特徴としている。

-
- 4 初期の主要文献のいくつかを挙げると、Sheldon Anderson, "Poland and the Marshall Plan, 1947-1949," *Diplomatic History*, Vol.15, No.4, Fall 1991; David Holloway, *Stalin and the Bomb: The Soviet Union and Atomic Energy 1939-1956*, Yale University Press, 1996; Vojtech Mastny, *The Cold War and Soviet Insecurity: The Stalin Years*, Oxford University Press, 1996; Vladislav Zubok and Constantine Pleshakov, *Inside the Kremlin's Cold War: from Stalin to Khrushchev*, Harvard University Press, 1996.
 - 5 Qiang Zhai, *China and the Vietnam Wars, 1950-1975*, University of North Carolina Press, 2000; Chen Jian, *Mao's China and the Cold War*, University of North Carolina Press, 2001.
 - 6 冷戦史の多様なアプローチの提唱者は当時LSEの教授であったオッド・アルネ・ウェスタッドである。当時の彼の提言は以下を参照。Odd Arne Westad, "Introduction: Reviewing the Cold War", in Westad (ed.), *Reviewing the Cold War: Approaches, Interpretations, Theory*, Routledge, 2000.
 - 7 O. A. Westad, *The Global Cold War: Third World Interventions and the Making of Our Times*, Cambridge University Press, 2005. (邦訳、O・A・ウェスタッド『グローバル冷戦史—第三世界への介入と現代世界の形成』名古屋大学出版会、2010年)
 - 8 M. P. Leffler & O. A. Westad (eds.), *The Cambridge History of the Cold War*, 3 volumes, Cambridge University Press, 2010; Richard Immerman & Petra Goedde (eds.), *The Oxford Handbook of the Cold War*, Oxford University Press, 2013; Artemy M. Kalinovsky, Craig Daigle (eds.), *The Routledge Handbook of the Cold War*, Routledge, 2014.

ヨーロッパ地域を対象にした冷戦史研究の発展に目を転じると、90年代末から2000年代初頭には、各国外交史や二国間関係史を超えた、マルチアカイバルで多国間の国際関係を論じる試みが生まれ始める⁹。西ヨーロッパの戦後初期の安全保障体制の形成過程をテーマとした論文集は1980年代半ばからいくつか存在したが¹⁰、2000年代に入り時代やテーマを限定しつつ、幅広い国を論じる論文集が爆発的に増えた¹¹。このビッグバンによって、ヨーロッパ地域を面で捉えることを可能にする研究基盤が蓄積されていった。また平行して、NATOやワルシャワ条約機構、コメコンやヨーロッパ統合といった多国間の制度的枠組みを歴史的に分析する研究も活況を呈した¹²。近年では、ヨーロッパの中立・非同盟諸国¹³、北欧や地中海・バルカンなどヨーロッパの周辺地域¹⁴、さらには中国とヨーロッパの関係や¹⁵、第二世界と第三世界の関係などにまで歴史研究の裾野は広がっている¹⁶。

冷戦史研究が肥大化し、文化や社会の領域もが含まれていく中で¹⁷、あらためて一体「冷戦とは何なのか」が問われるようになったのは必然だった¹⁸。そしてイタリアの歴史家フェデリーコ・ロメロは、冷戦史研究を概観する2014年の論考で、冷戦研究のグローバル化やアプローチを多様化する重要性を受け入れつつも、冷戦の様々な地域・テーマに関して、その中核や優先順位を明確にする必要があると主張し、やはりヨーロッパを冷戦の中心に据えるべきではないかと提議した¹⁹。それから間もなく、ウェスタッドは、2017年に彼の冷戦研究の集大成となる *The Cold War: A World History* を

9 Marc Trachtenberg, *A Constructed Peace: The Making of the European Settlement, 1945-1963*, Princeton University Press, 1999; Jeffrey Glen Giauque, *Grand Designs and Visions of Unity: the Atlantic Powers and the Reorganization of Western Europe, 1955-1963*, University of North Carolina Press, 2002.

10 Olav Riste (ed.), *Western Security: the Formative Years*, Columbia University Press, 1985; Beatrice Heuser and Robert O'Neill (eds.), *Securing Peace in Europe, 1945-62: Thoughts for the Post-Cold War Era*, St. Martin's Press, 1992; R. Ahmann, A. M. Birke, M. Howard (eds.), *The Quest for Stability: Problems of West European Security 1918-1957*, Oxford Oxford University Press, 1993; Norbert Wiggershaus and Roland G. Foerster (eds.), *The Western Security Community, 1948-1950: Common Problems and Conflicting National Interests during the Foundation Phase of the North Atlantic Alliance*, Berg, 1993; Varsori, Antonio and Elena Calandri (eds.), *The Failure of Peace in Europe, 1943-48*, Palgrave, 2002.

世に送り出した（以下『冷戦』）²⁰。さらにその3年後にローレンツ・ルーチは、同じく浩瀚な冷戦史の大著 *Cold Wars: Asia, the Middle East, Europe* を上梓した（以下『*Cold Wars*』）²¹。現時点で単著としての包括的な冷戦史は、この二冊が最高水準のものであろう。それゆえ次に、ウェスタッドとルーチの議論を比較しつつ、両者の「「冷戦」の語り方」の特徴を見ていきたい。特にルーチが、複数の冷戦、そして地域の冷戦に注目しつつ冷戦を語っている点が本稿の文脈で重要となる。

2. ウェスタッドの「冷戦」とルーチの「冷戦」

冷戦史研究のグローバルな拡大は、一次史料の開示という歴史研究にとっ

-
- 11 Günter Bischof and Saki Dockrill (eds.), *Cold War Respite: The Geneva Summit of 1955*, Louisiana State University Press, 2000; John P. S. Gearson and Kori Schake (eds.), *The Berlin Wall Crisis: Perspectives on Cold War Alliances*, Palgrave, Hardback, December 2002; Wilfried Loth (ed.), *Europe, Cold War and Co-Existence 1953-1965*, Frank Cass & Co, 2004; Klaus Larres and Kenneth Alan Osgood (eds.), *The Cold War after Stalin's Death: A Missed Opportunity for Peace?*, Rowman & Littlefield Pub Inc, 2006; Frédéric Bozo, N. Piers Ludlow, Marie-Pierre Rey, Leopoldo Nuti (eds.), *Europe and the End of the Cold War: A Reappraisal*, Routledge, 2007; Wilfried Loth and Georges-Henri Soutou (eds.), *The Making of Détente: Eastern and Western Europe in the Cold War, 1965-75*, Routledge, 2008; Andreas Wenger, Vojtech Mastny, and Christian Nuenlist (eds.), *Origins of the European Security System: The Helsinki Process Revisited, 1965-75*, Routledge, 2008; Carole Fink and Bernd Schaefer (ed.), *Ostpolitik, 1969-1974: European and Global Responses*, Cambridge University Press, 2008; Oliver Bange and Gottfried Niedhart (eds.), *Helsinki 1975 and the Transformation of Europe*, Berghahn Books, 2008; Leopoldo Nuti (ed.), *The Crisis of Détente in Europe: From Helsinki to Gorbachev 1975-1985*, Routledge, 2009; Frédéric Bozo, Marie-Pierre Rey, N. Piers Ludlow, Bernd Rother (eds.), *Visions of the End of the Cold War in Europe, 1945-1990*, Berghahn Books, 2012; Wolfgang Mueller, Michael Gehler, Arnold Suppan (eds.), *The Revolutions of 1989: A Handbook*, Austrian Academy of Sciences, 2014; Nuti, Leopoldo, Frederic Bozo, Marie-Pierre Rey, Bernd Rother (eds.), *The Euromissile Crisis and the End of the Cold War*, Stanford University Press, 2015; Frédéric Bozo, Andreas Rödder, Mary Elise Sarotte (eds.), *German Reunification: A Multinational History*, Routledge, 2016; Poul Villaume, Rasmus Mariager, Helle Porsdam (eds.), *The 'Long 1970s': Human Rights, East-West Détente and Transnational Relations*, Routledge, 2016; Olivier Bange, Poul Villaume (eds.), *The Long Détente: Changing Concepts of Security and Cooperation in Europe, 1950s-1980s*, Central European University Press, 2017; Nicolas Badalassi and Sarah B. Snyder (eds.), *The CSCE and the End of the Cold War: Diplomacy, Societies and Human Rights, 1972-1990*, Berghahn Books, 2018.

て不可欠な背景があったことは確かだが、さらには、アメリカ以外のアクターの主体性の回復という要請があったように思われる。アメリカ外交やアメリカから見た世界が冷戦の全てではない。アメリカ以外の国々の利益やイデオロギーに基づく外交、対立や反発、あるいは緊張緩和や発展・援助を求める意思もまた、冷戦の様々な面を構成し、相互に影響を及ぼしあい、歴史を動かしていた。公文書が利用可能になると、それらを積極的に用いた歴史論文が次々に発表された。さらに、一次史料へのアクセスが困難な国(例えば北朝鮮)に関しても、他国のアーカイブの史料を利用することで、少しでもそ

- 12 Christian Nuenlist and Anna Locher (eds.), *Transatlantic Relations at Stake: Aspects of NATO, 1956 – 1972*, Center for Security Studies (CSS), 2006; Andreas Wenger, Christian Nuenlist and Anna Locher (eds.), *Transforming NATO in the Cold War: Challenges beyond Deterrence in the 1960s*, Routledge, 2006; Mary Ann Heiss and S. Victor Papacosma (eds.), *NATO and the Warsaw Pact: Intrabloc Conflicts*, The Kent State University Press, 2008; Evanthis Hatzivassiliou, *NATO and Western Perceptions of the Soviet Bloc: Alliance Analysis and Reporting, 1951-69*, Routledge, 2014; Suvi Kansikas, *Socialist Countries Face the European Community: Soviet-Bloc Controversies over East-West Trade*, Peter Lang, 2014; Laurien Crump, *The Warsaw Pact Reconsidered: International Relations in Eastern Europe, 1955-1969*, Routledge, 2015. ヨーロッパ統合史研究の研究史に関しては、益田実・山本健(編著)『欧州統合史 二つの世界大戦からブレグジットまで』ミネルヴァ書房、2019年ならびに、遠藤乾(編)『ヨーロッパ統合史』[第2版] 名古屋大学出版会、2024年を参照されたい。
- 13 Rinna Kullaa, *Non-alignment and Its Origins in Cold War Europe: Yugoslavia, Finland and the Soviet Challenge*, Bloomsbury USA Academic, 2012; Mark Kramer, et al. (eds.), *The Soviet Union and Cold War Neutrality and Nonalignment in Europe*, Lexington Books, 2022.
- 14 2006年の *Contemporary European History* 第15巻第4号は北欧諸国のフィンランド、ノルウェー、スウェーデン、デンマークとドイツ問題が特集として組まれている。また、次のような論文集も刊行されている。Calandri Elena, Daniele Caviglia, Antonio Varsori (eds.), *Détente in Cold War Europe: Politics and Diplomacy in the Mediterranean and the Middle East*, I. B. Tauris & Company, 2016; Svetozar Rajak, Konstantina E. Botsiou, Eirini Karamouzi, Evanthis Hatzivassiliou (eds.), *The Balkans in the Cold War*, Palgrave Macmillan, 2017.
- 15 Martin Albers, *Britain, France, West Germany and the People's Republic of China, 1969-1982: The European Dimension of China's Great Transition*, Palgrave Macmillan, 2016; Janick Marina Schaufelbuehl, Marco Wyss, Valeria Zanier (eds.), *Europe and China in the Cold War: Exchanges Beyond the Bloc Logic and the Sino-Soviet Split*, Brill, 2018; Weiqing Song (ed.), *China's Relations with Central and Eastern Europe*, Routledge, 2019; Jan Zofka, Peter Vamos, Soeren Urbansky (eds.), *Beyond the Kremlin's Reach?: Eastern Europe and China in the Cold War Era*, Routledge, 2023.

の実態に迫ろうとする試みもなされた。『チャーチルの冷戦』など、「〇〇の冷戦」、「〇〇と冷戦」、「〇〇における冷戦」、「〇〇冷戦史」といった書名を冠する研究書も数多く発表された²²。公文書が依然として未開示であったり、公開が不十分な国は少なくないが、冷戦の終焉から30年以上経った今日、かつてなく多くの国・地域の「冷戦」が論じられるに至っている。そして「冷戦」がインフレ気味になり、その視点が多様化する中で、いかに「冷戦」を語るのかが問われることになる。

歴大な冷戦史研究が積み上がる中で、単著として冷戦を包括的に論じた上述の二冊の大著、ウェスタッドの『冷戦』とルーチの『Cold Wars』（どちらも原著で700ページを超える）の「冷戦」の語り方は、それゆえ検討に値

-
- 16 David C. Engerman, “The Second World’s Third World”, *Kritika* Vol. 12, No. 1, 2011; Anna Calori, et al. (eds.), *Between East and South: Spaces of Interaction in the Globalizing Economy of the Cold War*, De Gruyter Oldenbourg, 2019; James Mark, Bogdan C. Iacob, Tobias Rupprecht, Ljubica Spaskovska, 1989: *A Global History of Eastern Europe*, Cambridge University Press, 2019; Philip E. Muehlenbeck and Natalia Telepneva (eds.), *Warsaw Pact Intervention in the Third World: Aid and Influence in the Cold War*, Bloomsbury USA Academic, 2019; James Mark, Artemy M. Kalinovsky, Steffi Marung (eds.), *Alternative Globalizations: Eastern Europe and the Postcolonial World*, Indiana University Press, 2020; Max Trecker, *Red Money for the Global South: East-South Economic Relations in the Cold War*, Routledge, 2020; James Mark, et al., *Socialism Goes Global: The Soviet Union and Eastern Europe in the Age of Decolonization*, Oxford University Press, 2022; 藤澤潤『ソ連のコメコン政策と冷戦—エネルギー資源問題とグローバル化』東京大学出版会、2019年。
 - 17 冷戦と文化に関しては、次の文献を参照されたい。齋藤嘉臣「冷戦と文化的なもの」益田実、池田亮、青野利彦、齋藤嘉臣（編）『冷戦史を問いなおす』ミネルヴァ書房、2015年。冷戦と社会を結びつけた先駆的研究としては、Jeremi Suri, *Power and Protest: Global Revolution and the Rise of Détente*, Harvard University Press, 2003が挙げられる。また、国家アクターではなく人々の歴史として冷戦を描いた画期的研究として、益田肇『人びとのなかの冷戦世界—想像が現実となるとき』岩波書店、2021年。
 - 18 Holger Nehring, “What Was the Cold War?”, *The English Historical Review*, Vol. 127, No. 527, 2012.
 - 19 Federico Romero, “Cold War historiography at the crossroads”, *Cold War History*, Vol. 14, No. 4, 2014.
 - 20 O. A. Westad, *The Cold War: A World History*, Basic Books, 2017. 邦訳、O・A・ウェスタッド『冷戦—ワールド・ヒストリー』岩波書店、2020年。
 - 21 Lorenz M. Lüthi, *Cold Wars: Asia, the Middle East, Europe*, Cambridge University Press, 2020.

するだろう。本節では、両者が冷戦期の様々な出来事をどのように記述したり評価したりしているかという点には拘泥せずに、むしろ、両著作を比較することで、全体としてどのように「冷戦」を語っているかを分析していくことにしたい。

まずは両者の基本的な共通点から確認しておこう。ウェスタッドもルーチも、冷戦をグローバルなものとして捉えている。とりわけ、いわゆる「第三世界」の動向と、それと密接に関係する「冷戦と脱植民地化」という問題をどちらも重視している²³。「第三世界」についてごく簡単に付言すれば、しばしば一括りにされがちなそれを、ルーチは『*Cold Wars*』の第4部で、「アジア・アフリカ国際主義」、「非同盟運動」、「汎イスラーム主義」の三つに分け(それぞれに1章ずつ充て、「冷戦のオルタナティブ」として「地域冷戦」とは別に取り扱っている)、特に「アジア・アフリカ国際主義」と「非同盟運動」が異なる点を強調し、より詳しく論じている²⁴。ウェスタッドはその二つの差異を認識してはいるが、ごく簡単な言及にとどめている(上394、

22 例えば、Klaus Larres, *Churchill's Cold War*, Yale University Press, 2002; William Glenn Gray, *Germany's Cold War: The Global Campaign to Isolate East Germany, 1949-1969*, The University of North Carolina Press, 2003; Sue Onslow (ed.), *Cold War in Southern Africa: White Power, Black Liberation*, Routledge, 2009; Hal Brands, *Latin America's Cold War*, Harvard University Press, 2010; Tsuyoshi Hasegawa (ed.), *The Cold War in East Asia, 1945-1991*, Stanford University Press, 2011; Garret Martin, *General De Gaulle's Cold War: Challenging American Hegemony, 1963-1968*, Berghahn Books, 2013; Robert J. McMahon (ed.), *The Cold War in the Third World*, Oxford University Press, 2013; Ang Cheng Guan, *Southeast Asia's Cold War: An Interpretive History*, University of Hawaii Press, 2018; Thomas C. Field Jr., Stella Kreppel and Vanni Pettina (eds.), *Latin America and the Global Cold War*, The University of North Carolina Press, 2020; Manu Bhagavan (ed.), *India and the Cold War*, University of North Carolina Press, 2019; Mattias Fibiger, *Suharto's Cold War: Indonesia, Southeast Asia, and the World*, Oxford University Press, 2023; 下斗米伸夫『アジア冷戦史』中央公論新社、2004年; 下斗米伸夫『日本冷戦史 1945-1956』講談社、2021年。

23 東南アジアに焦点を当てた「冷戦と脱植民地化」に関する論文集としては、Christopher E. Goscha and Christian F. Ostermann (eds.), *Connecting Histories: Decolonization and the Cold War in Southeast Asia, 1945-1962*, Woodrow Wilson Center Press, 2009. また「冷戦と脱植民地化」をテーマとした近著としてジェシカ・チャップマンが、インド、エジプト、コンゴ、ヴェトナム、アンゴラ、イランの6か国に焦点を合わせる形でそれを論じ、第三世界から見た冷戦を描いている。Jessica M. Chapman, *Remaking the World: Decolonization and the Cold War*, University Press of Kentucky, 2023.

下170、174) ²⁵。

一見すると、ウェスタッドとルーチの「冷戦」の捉え方の大きな違いは、前者が「一つの冷戦」を論じているのに対して、後者はその書名(『*Cold Wars*』)が示唆するように、「複数の冷戦」を論じているところにある²⁶。ルーチは2008年に中ソ対立に関する最初の単著を出版した後²⁷、多方面で精力的に論文を発表し、2015年には「地域冷戦 (Regional Cold Wars)」をテーマとした論文集の編者を務めた²⁸。そして彼は2020年に、満を持して『*Cold Wars*』を単独で完成させた。ルーチは『*Cold Wars*』の序論 (pp. 1-2) に

24 次の文献も参照、Lorenz M. Lüthi, “Non-Alignment, 1946-65: Its Establishment and Struggle against Afro-Asianism,” *Humanity*, Vol. 7, No. 2, 2016. 中立・非同盟運動も近年、第三世界諸国の史料を用いた文献が増えている冷戦史研究の一分野となっている。例えば、Sandra Bott, Jussi M. Hanhimäki, Janick Schaufelbuehl, Marco Wyss (eds.), *Neutrality and Neutralism in the Global Cold War: Between or within the Blocs?*, Routledge, 2015; Natasa Miskovic, Harald Fischer-Tiné and Nada Böskovska (eds.), *The Non-Aligned Movement and the Cold War: Delhi - Bandung - Belgrade*, Routledge, 2017; Jurgen Dinkel, *The Non-Aligned Movement: Genesis, Organization and Politics (1927-1992)*, Brill Academic Publishing, 2018; Jovan Čavoški, *Non-Aligned Movement Summits: A History*, Bloomsbury Academic, 2022; Zvonimir Stojić, Robert Niebuhr, David Pickus, *Yugoslavia, Nonalignment and Cold War Globalism: Tito's International Rise, Celebrity and Fall*, Routledge, 2024.

25 ウェスタッドのLSE時代の教え子でもあるジェフ・バーンも、以下の文献でバンドン会議と非同盟運動の質の違いを強調している。Jeffrey James Byrne, “Beyond Continents, Colours, and the Cold War: Yugoslavia, Algeria, and the Struggle for Non-Alignment”, *The International History Review*, Vol. 37, No. 5, 2015. バーンはまた、彼の博士論文に基づくアルジェリア外交を論じた単著 *Mecca of Revolution: Algeria, Decolonization, and the Third World Order* (Oxford University Press, 2016) の中で、この著作が「第三世界における冷戦 (the Cold War in the Third World)」についての本というよりも、「第三世界の冷戦 (the Third World's Cold War)」についての本であると強調している。実際この本では、アルジェリアがどのように「冷戦」を戦ったのかが、アルジェリアの一次史料に基づいて分析されている。例えば、国内では独立後の国家建設においてモデルになろうと努め、対外政策では革命のイデオロギーに基づき他国の独立運動を支援したり、アルジェリアを武器輸出の経由地としたり、反政府運動の訓練の場を提供したり、反目し合う第三世界諸国をまとめようと奮闘したりする様が、指導者ベン・ベラがクーデターで失脚する1965年までの範囲で論じられている。「地域冷戦」とはまた違った形の冷戦史研究として、またアルジェリアが中心ではあるものの単なる一国外交史を超えた広がりを持つ(米ソ中心ではない)冷戦史の語り方の一例として、バーンの議論も興味深い。

26 Jeremi Suri, “The History of the Cold War, Thirty Years After”, *Diplomatic History*, Vol. 46, No. 4, 2022, p. 809.

27 Lorenz M. Lüthi, *The Sino-Soviet Split: Cold War in the Communist World*, Princeton University Press, 2008.

において、同書の目的の一つが焦点を、グローバルな(システムの)米ソ冷戦から、「地域的な、すなわちサブシステムの冷戦」へと向けることであると強調する。そしてそれは、「脱植民地化を冷戦の物語に再結合させることになる」と述べる。ルーチが取り上げる「地域」はアジア、中東、そしてヨーロッパの三つに絞られているが、同書ではそれら三つの地域の内部のみならず、地域間の相互関連をも論じるとしている。実際、同書全体において米ソ関係は論じられてはいるが、その記述は淡泊である。

他方でウェスタッドは冷戦を、「国際的な国家システム」と「イデオロギー的な対立」の二つの側面を持つ「一つの冷戦」と捉えている(下424)²⁹。とはいえ、実際の記述では、アジア、中東、ヨーロッパのみならず、ルーチが扱っていないラテンアメリカやアフリカについても論じられている。ただし、ウェスタッドはルーチのように「地域冷戦」を分析枠組みとしてことさらに強調してはいない。またウェスタッドは、米ソ二極体制を「国際システムとしての冷戦」としているものの、各地域を必ずしも「サブシステム」として論じてはいない。くわえてその「語り方」には、ニュアンスの違いがある。例えば13章で論じられているラテンアメリカに関しては、ラテンアメリカ地域独自の「冷戦」の特徴が論じられている。しかし16章「冷戦とインド」では、インドから見た冷戦と南アジア地域への米ソ中の関与がもっぱら論じられている。17章でも米ソがいかに中東地域に関与したか、あるいは中東国際政治の「大渦巻」に巻き込まれたかが描かれているが、中東独自の地域冷戦のようなものが明示されているわけではない。

ウェスタッドとルーチの間のより根本的な違いは、その焦点の当て方にある。ウェスタッドの『冷戦』の最大の特徴は、冷戦における普遍主義的イデ

28 Lorenz M. Lüthi (ed.), *The Regional Cold Wars in Europe, East Asia, and the Middle East: Crucial Periods and Turning Points*, Stanford University Press, 2015. ルーチはまた、中印国境紛争に関する論文集の編者も務めている。Lorenz M. Lüthi, Amit R. Das Gupta (eds), *The Sino-Indian War of 1962: New Perspectives*, Routledge India, 2017.

29 ウェスタッドは冷戦が、「世界のおもな大国の全てが何らかの形で冷戦との関係に基づいて外交政策を定めていたという意味で」、「一つの国際システムを構成していた」と見なしている(上2)。

オロギーの重要性を前面に出しているところにあるだろう。そのイデオロギー対立の起源を論じるため、ウェスタッドは、議論を一九世紀半ばのヨーロッパにまで遡らせて『冷戦』を論じている。ウェスタッドの冷戦論は、イデオロギー対立と、それぞれのイデオロギーをモデルとして体现する米ソが、世界の各国・各地域にどのような影響を与え、そして世界を変容させたのかに主眼がある。「世界を形作った（World Making）」（序章のタイトル）ものとして冷戦（イデオロギーと米ソ）をとらえ、その歴史を「世界史」として描いたのが『冷戦 ワールド・ヒストリー』であるといえよう³⁰。

世界各国・各地域を包括的に論じようとする同書ではあるが、特徴的なのは、各国・各地域において共産党がどのように活動し、どのように影響力を広げ、あるいは逆に對抗勢力によって弾圧されたのかが論じられているところにある。その際、しばしばソ連の支援を受けるなどして共産主義者たちが権力を握ることもあれば、他のローカルな右派勢力やアメリカの介入によって潰されることもあった。アルジェリアやキューバなど、イデオロギーに基づき国家建設を進めるのみならず、グローバルに行動し影響を与えた主体もあった。脱植民地化という歴史の潮流と冷戦のイデオロギーが交錯したという議論は、前著『グローバル冷戦史』から一貫するウェスタッドのテーマでもある。冷戦は単なる米ソ超大国間の対立ではなく、それが様々な形で「世界を形成する」ものであったからこそ冷戦を世界史として論じる意味がある、とウェスタッドは考えているのだろう（上24）。

ウェスタッドはさらに『冷戦』の中で、ごく簡単にではあるが、中国の少数民族（上331）やディエゴガルシアから強制退去させられた1200人の人々（上368）など、「世界史」のスケールからすればミクロな話にまで言及している。限られた紙幅の中で何を書き何を削るかは、歴史書を執筆する上で常に大きな問題となる。冷戦の中で虐げられた人々、冷戦がもたらした変化が生んだ悲劇へのこのような眼差しは、冷戦を論じる上での彼の問題意識を反

30 ウェスタッド『冷戦』の全体の構成については、倉科一希の書評が上手く紹介しているため、ここでは繰り返さない。『防衛学研究』第64号（2021年）に掲載されている書評を参照されたい。

映している。

他方でルーチは、むしろ冷戦の国家間対立を重視している。ウェスタッドと比較すると、『Cold Wars』のアプローチはもっぱら政治外交的であり、経済社会面についての言及は限定的である。他の冷戦史と比べても、ルーチの語り方として異色なのは、第二次世界大戦後の約10年間を米英ソ三大国の時代としているところであろう³¹。アジア、中東、ヨーロッパという三地域に注目するルーチは、特に戦後の中東がイギリスの勢力圏であったことを強調する。それをアピールするためか、早くも『Cold Wars』の第2章において、イギリスの勢力圏としての中東とアラブ連盟の形成過程が論じられる³²。冷戦史の中で中東がこの位置で論じられることに面食らう読者もいるだろう。この第2章を含め、2～4章で構成される『Cold Wars』の第一部では、第3章がソ連圏の形成、第4章がアメリカを中心とする「自由世界」の形成という配置になっており、米英ソ三つの勢力圏の形成過程が論じられると同時に、当初からの内部対立の萌芽があったことが指摘される。そして、『Cold Wars』全体では、まずスエズ危機を境に1950年代末までに勢力圏を持つ大国としてのイギリスが没落し、その結果米ソ二極体制がようやく生まれる。その後、1980年代末にソ連も自らの「帝国」を維持できなくなる。そして最後に残った大国がアメリカであったという見取り図を描いている (p. 609)。このような図式に賛同するかはさておき、地域、とりわけ中東という地域も重視しつつ「冷戦」を見ることで、「戦後の二極体制」といった定型的な見方とは異なる、ルーチ独特の語り方が試みられている点は注目して良いだろう。

31 ちなみにウェスタッドは、第二次世界大戦後の世界を米ソ二極システムの到来として描いているが(上4-6)、アメリカはグローバルな覇権国として登場し、ソ連と世界各地の共産主義政党のみがアメリカの覇権に対抗する挑戦者であったとしている(上62)。イギリスは、ウェスタッドによれば、1945年までに「グローバルな力の中核としてアメリカに大幅に水をあけられアメリカの影に隠れてしまった」(上96)と位置づけられている。植民地帝国としてのイギリスの没落はさらに第10章「帝国の解体」の中で簡単に描かれている。

32 ルーチによれば、中東はイギリスの勢力圏であり、また中東諸国の主体的な取り組みとしてアラブ連盟が形成されたため、1960年代までこの地域に冷戦はやってこなかったとされる。

冷戦の終焉の語り方

米ソ冷戦を相対化し、冷戦の視野をグローバルに広げたとき、冷戦の終焉の語り方はどうなるのだろうか。冷戦終焉の強調点についても、ウェスタッドとルーチの議論は大きく異なる。ウェスタッドが重視するのはグローバル経済の変化である。国際貿易が活発化し、輸出主導型発展モデルを採用したアメリカと密接な関係を持つアジア諸国は急速な経済成長を実現し、人工衛星、光ファイバーケーブル、コンピューターといった当時の先端技術は米ソ間の技術格差を拡大させた。「新たなテクノロジーにより、多くの人々が情報を入手し、ビジネスを行い、将来について考える方法が変容し始め」、「グローバルなイデオロギー的対立をますます無意味なもの」にしていったとウェスタッドは指摘する（下336）。ソ連および東欧諸国はこのような資本主義経済のグローバルな変化から取り残されていった。くわえて、人権などの「権利の主張」や宗教・言語・エスニシティに基づく「アイデンティティの主張」が台頭し、それらが冷戦イデオロギーを凌駕し、「個人と集団のアイデンティティを無視してきた国家に対抗する行動」が始まったとされる（下365）。ウェスタッドにとって、「世界を形成」するものが普遍主義的イデオロギーだったとすれば、それらが力を失い、新たに「世界を形成」するダイナミズムとして変化したグローバル資本主義経済や様々なアイデンティティが取って代わったとき、それが冷戦の実質的な終焉ということになる³³。

一方、地域の冷戦や複数の冷戦を重視するルーチによる冷戦終焉の語り方は独特である。彼は、地域冷戦の早い段階での終焉の重要性を強調し、「1980年代初頭までに、アジア、中東、ヨーロッパにおける30年以上にわたる構造変化が、超大国間の対立が実際にはもっと早い時期に終結しうる条件を整えていた」という（p. 563）。「1980年代後半に超大国がグローバルな冷戦を終結させることを可能にした構造的変化を生み出したのは、主としてこれら3つの地域（アジア、中東、ヨーロッパ）であった」のである（p. 7-8）。す

33 ただしウェスタッドは、「国際的な国家システムとしての冷戦は、モスクワでミハイル・ゴルバチョフがソ連を消滅させる文書に署名した、あの[1991年]12月の寒くどんよりと曇った日に終焉した。しかし・・・、イデオロギー的な対立としての冷戦は[アメリカが勝利したことで]部分的にしか消滅しなかった」（下424）としている。

なわち、他の地域では「冷戦」はとっくに終わっており、冷戦の対立がそれらの地域の国際関係において重要な影響を及ぼさなくなっていたにもかかわらず、米ソだけが最後の最後まで、冷戦の戦士として最後まで戦い続けた(p. 564)という構図でルーチは冷戦の終焉を描いている³⁴。

ではルーチは何を持ってして地域冷戦の終わりとしているのか。彼は「構造的終点」(structural endpoints)という表現を用いているが、それを規定するためには「異なった基準、あるいはその組み合わせを用いる必要がある」として、大きく三つの基準を提示している(pp. 489-490)。第一の基準が「長年のパートナーシップや確立されたブロックの崩壊」である。ルーチは例として、「1978年から79年にかけての東アジアにおける共産主義主導の民族解放運動間の団結」が崩壊したことや、80年代初頭のポーランド危機に始まる東ヨーロッパの社会主義陣営の経済的崩壊などをあげる。第二に、冷戦の対立関係の政治的・経済的パートナーシップへの変化である。やはり例として、1979年の米中国交正常化や、東欧諸国がグローバルな資本主義経済へと統合されていったことをあげる。三つ目の「構造的終点」の基準として、ルーチは「国際関係の秩序原則としての冷戦を超越した現象の出現」を指摘する。イスラーム主義運動の台頭や、1979年のイラン・イスラーム共和国の樹立がその例だと言う。

ルーチは複数の基準に基づき多角的な説明を試みていると言える。それは世界の多様な地域の変化を説明するために必要なのだろう。だがそれは同時に、議論のわかりにくさにもなっているように思われる。結局、地域冷戦の「構造」と何か。なぜ他でもなくこれらの事例が「構造的終点」なのか。例えば、ヨーロッパ地域でいえば、なぜワルシャワ条約機構の解体(1990年)の方が「構造的終点」ではないのだろうか。「基準」をどの出来事に当てはめるべきなのかという点について、恣意的な印象は拭えない。

冷戦の終焉に関してはウェスタッドとルーチの共通点もいくつか指摘できる。

34 米ソ間の冷戦の終焉についてルーチは、第23章(The End of the Superpower Cold War)でゴルバチョフの登場から、1989年の東欧革命を経て、91年のソ連崩壊まで一通り述べているが、他書と比べて特筆することはあまりない。

まず、グローバル経済であれ、各地域の構造的変化であれ、1970年代からの変化が冷戦の終焉へとつながっていったという歴史の流れの捉え方は共通している。グローバル経済の発展や地域冷戦の終焉といった、米ソ冷戦の外部要因が最終的な冷戦の終焉にとって重要であったと論じている点も共通していると言える³⁵。また両者とも冷戦の終焉にとってアメリカのレーガン政権が進めた対外政策はそれほど重要ではなかったとする点で見解が一致している。「レーガンによる軍備増強と彼が示したソ連と積極的に対抗する姿勢が、アメリカに冷戦の勝利をもたらした根源的な原因である」という議論を、ウェスタッドは神話だと切り捨てる（下428）。ルーチも、レーガンが相手をノックアウトしたのではなく、ゴルバチョフの失敗によってソ連は息切れし超大国の地位を維持できなくなっただけだとしている（pp. 564-5）。

ヨーロッパ地域の語り方

両書の中でヨーロッパ地域はどう扱われているか。ポーランドの国境線問題、ドイツの分断、マーシャル・プラン、ベルリン封鎖、NATO 創設、東ベルリン暴動、ハンガリー動乱、ベルリン危機、ドゴール外交、プラハの春、ブラントの東方政策、CSCE、ユーロミサイル危機にNATOの二重決定、ポーランド危機、ベルリンの壁崩壊と1989年の東欧革命、そしてドイツ再統一。冷戦と呼ばれる時代にヨーロッパで起こったこれらの主要事件は、ウェスタッドもルーチも様々な形でもれなく取り上げている。では、両者のヨーロッパの語り方に何か特徴はあるのだろうか。

前述の通り、ウェスタッドの『冷戦』は社会経済の変化を論じているところに特徴がある。ヨーロッパもまたしかりで、ソ連による東欧諸国の占領、アメリカのヨーロッパへの関与、そして共産主義と資本主義によって、西と東のヨーロッパの社会経済は「ほとんど見違えるほどの変容を遂げた」とされる（上290）。東ヨーロッパには農業の集団化や重工業重視の工業化、計画経済などが、西ヨーロッパには福祉国家や混合経済、そしてアメリカ化が

35 例えば、「ソ連の社会主義体制そのものに根本的な欠陥があったがゆえに冷戦は終焉した」という内的要因を重視した語りと比較されたい。

もたらされた。同書の後半では、70年代以降のよく知られる東西ヨーロッパの社会経済の変化が記述されている³⁶。

ルーチは、ヨーロッパに関してテーマ毎に論じているのが構成面での特徴と言える。『Cold Wars』の第一部で、東ヨーロッパも含むソ連の勢力圏と(第3章)、西ヨーロッパを含むアメリカの勢力圏(第4章)が論じられた後、第二部でアジア、第三部で中東、そして第四部でアジア・アフリカ主義や非同盟運動など冷戦のオルタナティブが取り上げられ、ようやく第五部(Europe between Superpowers、14～16章)と第六部(European Détente、17～19章)でヨーロッパはやってくる。すでに本論の半分以上を過ぎてのことである。その第五部と第六部においては、西ヨーロッパ統合(第15章)、コメコン(第16章)、ドイツ問題(第17章)、CSCE(第18章)、ヴァチカン(第19章)といったテーマが取り上げられる。どの章も戦前あるいは戦後から議論を始めており、それぞれの章は通時的に書かれているが、本を通読する際には章が変わるたびに時間の流れがリセットされる感がある³⁷。その後、最終盤の第七部(The End of the Regional Cold Wars)に入り、中東(第20章)とアジア(第21章)が論じられた後、第22章で1970年代後半から80年代前半のヨーロッパが取り上げられる。そして、第23章において、ベルリンの壁の崩壊と1989年の東欧革命を含める形で、米ソ超大国の冷戦の終焉とソ連の崩壊までが扱われる³⁸。ウェスタッドの『冷戦』や他書と比べて、第16章でコメコンに焦点を

36 フリッツ・バーテルの近著(Fritz Bartel, *The Triumph of Broken Promises: The End of the Cold War and the Rise of Neoliberalism*, Harvard University Press, 2022)は、この点についてより踏み込んだ語りを提供し、もっぱらヨーロッパに焦点を当てた議論ではあるが、1970年代以降の社会経済の変化と冷戦の終焉を結びつけて論じている。すなわち、冷戦のイデオロギーは東西ヨーロッパにそれぞれより良い未来を約束したが、70年代に入ると東西どちらにおいてもそれが行き詰まる。「約束が破られる」(Broken Promises)中で、東西どちらも「新自由主義的」な方向での対応を模索していくが、西側はそれに成功したのに対して、東側陣営ではその改革が政治的に耐えきれずソ連・東欧諸国の社会主義体制は崩壊し冷戦は終わったとバーテルは主張する。ちなみにウェスタッドは、H-Diploのラウンドテーブルで同書を絶賛している。<https://issforum.org/roundtables/19396>

37 第五部の第14章のテーマは‘Nuclear Weapons’であり、この章では米ソの核軍拡競争や、イギリス、中国、フランス、西ドイツ、イスラエル、インドの核開発をめぐる国際関係がまとめて論じられている。

当てソ連・東欧諸国関係が詳しく論じられている点、そして第19章でヴァチカンと冷戦について取り上げられているところが目立つところだといえようか。

3. 地域冷戦の理論³⁹

ルーチは『*Cold Wars*』において米ソ中心の冷戦の語りから脱却し、地域冷戦をより重視しつつグローバルな冷戦を描こうと試みた。彼はアジア、中東、ヨーロッパの三地域を取り上げている。しかしメルヴィン・レフラーが『*Cold Wars*』への書評において厳しく批判しているように、同書におけるアジア冷戦や中東冷戦、そしてヨーロッパ冷戦が結局のところ何だったのか、十分明らかなではない。アジア、中東、ヨーロッパにおいて起こった様々な出来事は描写されているものの、それらが全体として（「サブシステム」として）何を意味しているのかが不明瞭な点は、『*Cold Wars*』の大きな欠点である⁴⁰。

だがルーチの議論の中に、地域冷戦や冷戦の「地域システム」を枠組みを考える上でのヒントがないわけではない。彼は、アジア、中東、ヨーロッパの地域冷戦において、3つの異なるタイプの紛争や発展があったとする（pp.609-610）。第一のカテゴリーが、第二次世界大戦以前から存在し、「冷戦の外にそのルーツがある」、それぞれの地域における対立や運動である。例えば、インドの脱植民地化、アジア・アフリカ国際主義、汎アラブ主義、

38 ルーチは、「1989年にグローバルな冷戦が終結したという考え方は、もっぱらヨーロッパ中心主義的な解釈である」と正しく指摘し、1989年という年はアジアや中東では大きな意味を持ったわけではないと強調する（p.563）。それゆえルーチは、さらに最後の第24章において1990年代以降のアジア、中東、ヨーロッパにおける冷戦の「遺産（レガシー）」を論じて本論を締めくくっている。

39 本稿における「地域」とは、隣接する複数の国から構成される地理的空間を指すこととする。ただし、地理学的な「ヨーロッパ」や「アフリカ」などだけが「地域」というわけではない。独自の「冷戦」のダイナミズムを有する空間であれば、地図帳の地域区分に捕らわれる必要はないと考える。逆に言えば、「地域冷戦」というものを考える際に、地理学的な地域を前提にしまうことで柔軟な捉え方を妨げる必要はないということでもある。

40 Melvyn P. Leffler の書評（タイトルなし）、*Journal of Cold War Studies*, Vol. 23, No. 2, 2021, p. 163.

汎イスラーム主義、アラブ・イスラエル対立などがあげられている。第二の
カテゴリーは、ロシア革命を直接のルーツとするものであり、中国革命やヴェ
トナム革命などがあげられ、これらは「第二次世界大戦までにソ連の支配の
外で独自の力学を発展させた」とされる⁴¹。最後に、1945年以降の米ソ冷戦
と結びついた発展や紛争である。地域冷戦には、それぞれにルーツと起源の
異なる対立や発展があり、それらが地域冷戦の独自の構成要素を形成してい
るということだろう。

注22でいくつか示したように、地域名を書名に冠する冷戦史研究はいく
つも存在するが、地域を限定して冷戦と呼ばれた時代に起こった出来事を詳
述したり論文集として幅広い国や地域独自のテーマが論じられていても、地
域冷戦の全体的な枠組みのようなものを明示的に論じたものは少ない。その
ような中で、ラテンアメリカ史と米墨関係を専門とするウィリアム・ブース
は、ラテンアメリカ冷戦に関する研究史の論文において示唆に富む議論を行っ
ている⁴²。ヨーロッパから少し離れることになるが、「地域冷戦」を理論的
に考察するためここでブースの議論を短く紹介することにした。ブースは
まず、ターニャ・ハーマーの議論を引用しながら「ラテンアメリカの文脈に
おいて、あるいはラテンアメリカ人にとって、冷戦が何を意味していたのか
は、いまだ相対的に不明確である。学述研究は、国や時代によって大きく分
断されている。この地域における冷戦がいつ始まり、いつ終わったのか、冷
戦は押しつけられたものなのか、それとも輸入されたものなのか、冷戦が時
代とともにどのように変化していったのかについては、ほとんど意見が一致
していない」と確認する⁴³。

それでもブースは、「冷戦がいつ、どのようにラテンアメリカで起こった
のかを問わねばならない」とし、また「他の地域から枠組みを輸入するだけ

41 ルーチはこのカテゴリーに「西ヨーロッパ統合」も含めている。しかし、統合史研究
はヨーロッパ統合のルーツをロシア革命より遙か以前に見いだしており、この点に関
してルーチの議論にはあまり説得力はない。

42 William Booth, "Rethinking Latin America's Cold War", *The Historical Journal*,
Vol. 64, No. 4, 2021.

43 Tanya Harmer, "The Cold War in Latin America", in Kalinovsky and Daigle (eds.),
The Routledge Handbook of the Cold War, p. 133.

では不十分であることは明かだ」と強調する。そして、近年の現代ラテンアメリカ史研究者らは、「ラテンアメリカにおける冷戦 (the Cold War in Latin America) というよりもむしろ、ラテンアメリカの冷戦 (Latin America's Cold War) について語ることが多くなった」という。ここでいう、「ラテンアメリカの冷戦」とは、独自のダイナミズムを持ち、他の地域とは区別される地域的な出来事を扱い、また米ソのグローバルな超大国間競争を単に繰り返すものでないものとされる。それは、「ラテンアメリカの主体性」がより重視される「冷戦」であり、現地の権力構造やエリートの行動とアメリカとの結びつきなどが重要な特徴となる。

そしてブースは、「ラテンアメリカの冷戦」を論じる枠組みとして多層モデルを提唱する。本稿では詳しい解説は控えるが、それは「地質学的」な形で幾重にも重なった対立の層としてラテンアメリカ独自の冷戦を捉える枠組みである (図1を参照)。その多層モデルでは、「ラテンアメリカの冷戦」の独自性を理解する上で、「地主と農民の対立」、「国家対市民」、「アメリカの覇権と国家主権の対立」、「資本家と労働者の対立」、「資本主義と社会主義のイデオロギー的対立」、そして「米ソ対立」がそれぞれの起源とタイムスパ

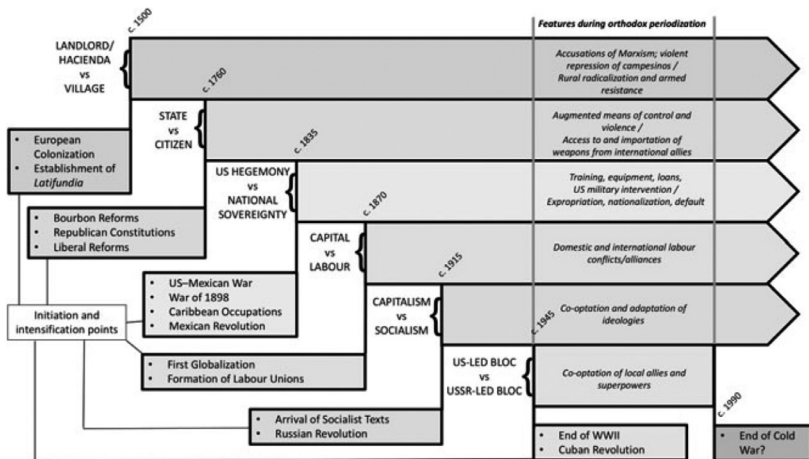


Fig 1. The Cold War as a 'layered stack' of Latin American conflicts

図1 ブースによる「ラテンアメリカの冷戦」の多層モデル

ンを持ちつつ重なり合っている。「ラテンアメリカの冷戦」とは、これらの要素が複雑に関係しながら展開していったものとして理解すべきであるとブースは論じるのである。

ブースがラテンアメリカ冷戦に関して、「他の地域から枠組みを輸入するだけでは不十分」であるというのと同じく、本稿も彼の多層モデルが、他の地域にそのまま応用できると論じたいわけではない。地域冷戦には、当然ながらそれぞれ独自の特徴があると想定すべきであろう。ブースの議論をここで紹介したのは、ラテンアメリカ地域の「冷戦」に関してこのような果敢な試みがあるという一例を示したかったからである。そして同時に、ブースやルーチの議論からの示唆を基に、地域冷戦を考える理論的作業仮説として、以下の三つの概念区分を提示してみたい。

- ① 「〇〇（地域名）における米ソ冷戦」(the Cold War in 〇〇)
- ② 「〇〇の冷戦」(〇〇's Cold War)
- ③ 「非冷戦」

①の「〇〇（地域名）における米ソ冷戦」(the Cold War in 〇〇)は、イデオロギー的あるいは権力政治的対立に基づく主に米ソ超大国の特定地域への介入や関与、政策立案が中心となる。それは、アメリカやソ連から見た地域冷戦が描かれることを意味する。このカテゴリーに、中国やキューバなどの外部勢力の介入も含めても良いだろう。

②の「〇〇の冷戦」(〇〇's Cold War)は、冷戦認識や米ソ超大国への対抗意識に基づく特定地域内のアクターの対外政策、ならびに国内冷戦と周辺諸国および米ソとの相互作用が中心となる。これは、その地域から見た冷戦であったり、その地域のアクターの主体性や特殊性が生み出す地域独自の多国間関係のダイナミズム、あるいは地域冷戦の対立の構図（とその変遷）に焦点が当てられる。

③の「非冷戦」は、それぞれの地域を特徴づけるものではあるが、冷戦のイデオロギー的・権力政治的対立とは直接的には無関係な諸要素である。中

東地域におけるアラブ・イスラエル対立や、南アフリカのアパルトヘイトなどはその典型となるだろう。

「地域冷戦」を考える上で、なぜ「非冷戦」という要素が重要となるのか。そもそも「冷戦」という言葉は非常にレトリカルであり、その言葉から何をイメージするかは人によって異なる。また冷戦研究がグローバルに拡散したこともあって、「冷戦史」と「戦後国際関係史」の違いが不明瞭になったとの批判も聞かれるようになった。それゆえ、それぞれの地域において何を持って「冷戦」とするかをある程度明確にする必要がある。そのためにも、どこが（地域）「冷戦」であり、何がそうでないのかを浮き彫りにするための要素として「非冷戦」というカテゴリーを意識することが意味を持つことになる。

①～③はおそらく、実際の歴史の中で厳密に仕分けすることは難しい。様々な要素が、様々な形で関連し合っているのが現実であろう。③と①が結びつき地域独自の「冷戦」が生まれたとき、②に近づいていくことになる。それゆえ、この三つの区分はあくまでも作業仮説のためのいわば道具である。特定地域の冷戦を分析したり、描いたりする際に諸要素を分類したり繋がりをも明確にしたりする上で、予備的作業を進める上で有益になると思われる⁴⁴。

4. 『ヨーロッパ冷戦史』の語り方

自著『ヨーロッパ冷戦史』は、まさにヨーロッパの「地域冷戦」を全体像を描くことを企図したものである。そこには二つの含意がある。一つは、ヨーロッパには米ソ冷戦や他地域とは異なる独自の「冷戦」があったという前提

44 例えばアフリカに関する次の文献は、Flavia Gasbarri, *US Foreign Policy and the End of the Cold War in Africa: A Bridge between Global Conflict and the New World Order, 1988-1994*, (Routledge, 2020)、①の地域冷戦が論じられてはいるが、②を扱った研究ではないと整理できる。

あるいは、この三つの区分を利用して、アフリカの地域冷戦に関しては①が中心であって、②に関してはアフリカ各国から見た冷戦（の寄せ集め）のようなものは描けても、アフリカ大陸全体を包括するような地域独自の多国間ダイナミズムを抽出することは難しい、といった議論もできるかもしれない。

である。今ひとつは、「戦後ヨーロッパ史」とは異なる「ヨーロッパ冷戦史」を論じることが主眼にあったという点である⁴⁵。

米ソ超大国の関与を抜きにしてヨーロッパ地域の冷戦を語ることは不可能である。それでも『ヨーロッパ冷戦史』は、①「ヨーロッパにおける米ソ冷戦」の要素を多分に含みつつも、可能な限り②「ヨーロッパの冷戦」を描くことを目指した。それは、東西ヨーロッパ諸国の主体性や、ヨーロッパ諸国間の相互作用、そしてヨーロッパ地域の多国間のダイナミズムに焦点を当てることを意味する。また、単なる「戦後ヨーロッパ史」とならないようにするとの意図から、執筆の際には③「非冷戦」に関しては極力そぎ落とすことが意識された。

ウェスタッドは、ラテンアメリカの冷戦が「国外的と言うよりも国内的なものであった」と論じる。ラテンアメリカの冷戦は、各国内における「右派と左派の間の暴力的な対立を軸に展開」したという意味である(下69)。それを踏まえて言えば、『ヨーロッパ冷戦史』は、「ヨーロッパの冷戦」の特徴をもっぱら国際的なものとして捉えている。逆に同書では、ヨーロッパ各国の国内冷戦や社会・経済・文化に関する記述は限定的である。その結果『ヨーロッパ冷戦史』では、ウェスタッド的な意味での冷戦のイデオロギー面の議論はあまりなされていない。

では、他地域と異なる「ヨーロッパの冷戦」の国際的特徴は何か。大きく三つある。第一にドイツ問題である。これには二重、あるいは三重の意味がある。まずドイツはヨーロッパ地域の潜在的脅威であるという第二次世界大戦前から存在する認識である。次に東西対立が深刻化する中で、ドイツが東西分断されたという問題である。これは「一つのドイツ」か「二つのドイツ」かという問題へと発展し、冷戦期ヨーロッパにおいて他の諸問題とも関連することとなった。さらにドイツ分断の派生として、ベルリンも分断都市となった。特に、西ベルリンが東ドイツの中での孤島のような状態に置かれる中で、

45 例えば、トニー・ジャット『ヨーロッパ戦後史』(みすず書房、2008年)やイアン・カーショール『分断と統合への試練：ヨーロッパ史1950-2017』(白水社、2019年)、あるいは松尾秀哉『ヨーロッパ現代史』(ちくま新書、2019年)と差別化を図ることが意図されている。

ベルリン封鎖やベルリン危機といった大きな事件を引き起こした。このようにドイツ問題は、ヨーロッパの地域冷戦において中核的な国際問題でありつづけた。

第二の特徴としてあげられるのが、東西二つの「陣営（ブロック）」が対峙するというヨーロッパ冷戦の構図である⁴⁶。『ヨーロッパ冷戦史』では「陣営」を「複数の国家によって構成される、ある種の認識共同体」とであると定義し、「同じ陣営内の国々は、同じ価値観、同じイデオロギーを共有し、その社会経済システムもまた共通しているとの認識を持っていた。また、相手陣営を敵であり、脅威であると認識する。自陣営の結束が乱れれば、それが相手陣営の利得となり、相手陣営を分断させられれば、自陣営の利得となる」といったゼロサムの認識を持つ、そのような国家の共同体でもあった」と説明している（103-4頁）。とりわけ他地域と異なるのは、そのような認識共同体が、NATO やワルシャワ条約機構、EC やコメコンといった多国間の制度的枠組みによって支えられていたところにある。それぞれの制度内では、人的交流が活発に行われ、軍事戦略の策定や共同演習などの軍事協力、そして様々な経済協力が進められた。同時に相手陣営の行動を脅威であると認識することで、認識共同体としての陣営は再生産されていった。このような特徴を論じるため、『ヨーロッパ冷戦史』ではヨーロッパ各国史の単なる寄せ集めにならない語り方を目指している。

『ヨーロッパ冷戦史』ではまた、単に二つの陣営をバラバラに記述するのではなく、次の図2を念頭に、陣営間の相互作用も積極的に論じた⁴⁷。

図2は、ヨーロッパ地域全体の国際関係を捉える上で、二つのレベルが意

46 「陣営（ブロック）」という分析概念への着眼は、Mary Kaldor, *The Imaginary War: Understanding the East-West Conflict*, Blackwell, 1991からインスピレーションを得ている。だが『ヨーロッパ冷戦史』で論じた「陣営」は、メアリー・カルドーの論じ方と同じではない。

47 ウェスタッドもルーチも、ヨーロッパにおける東西それぞれの陣営については論じているが、東西間の相互作用に関しては、ドゴール外交やブラントの東方政策、あるいはCSCEなどの主要トピックを除きあまり論じられていない。むしろどれほど分厚い歴史書を書くにしても、あらゆることを記述できるわけではない。何かが書かれていないことを指摘することで、両者の著書を批判したいわけではない。ここでの指摘はあくまでも、対比することによって「語り方」の特徴を示すことに主眼がある。

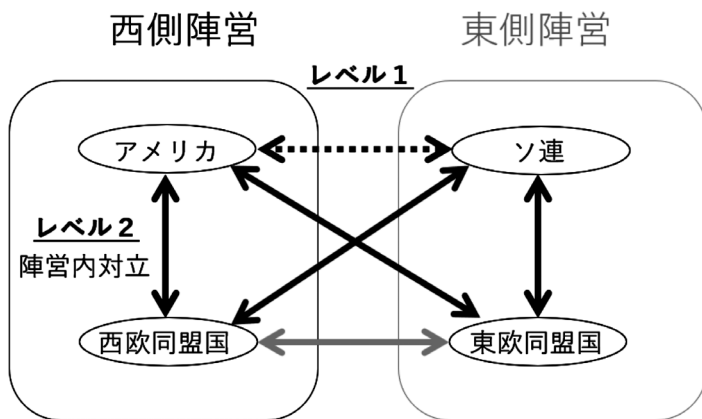


図 2

識されていることを示している。一つが東西陣営間の関係で、それはさらに、東西ヨーロッパ諸国間の関係、アメリカと東欧諸国、ソ連と西欧諸国、そしてヨーロッパ地域の諸問題をめぐる米ソ関係に分けられる。米ソ超大国のヨーロッパ政策のみならず、東欧諸国や西欧諸国の対米・対ソ政策というベクトルも重要である。さらに、第二のレベルが東西それぞれの陣営内の対立である。『ヨーロッパ冷戦史』では、これらの諸関係を通史的に描くことを試み、両陣営の形成過程をヨーロッパ冷戦の起源、両陣営の対立関係の解消をヨーロッパ冷戦の終焉としている。この点で、ルーチとは異なるヨーロッパの地域冷戦の語り方をしている。

『ヨーロッパ冷戦史』では、軍事・経済・政治という三つの領域の対立と緊張緩和（デタント）を分析枠組みとして論じているが、これがヨーロッパ冷戦の三つ目の国際的特徴となる。「デタント」という言葉は冷戦用語として古くから用いられているが、しばしばかなり曖昧、あるいは多義的に用いられる。「デタント」という用語の中身を腑分けし、意味を使い分けて用いられることは極めて少ない。あまたあるヨーロッパ冷戦に関する文献でも同様である。だがそれらの文献の議論や、ヨーロッパ諸国の冷戦・デタント政策は、①軍事的対立と、軍事領域における緊張緩和、②経済的分断、禁輸措

置、経済制裁といった経済冷戦と、東西貿易などの経済領域における緊張緩和、そして③ドイツ問題や戦後の国境線をめぐる政治的対立と、現状を相互に認め合うことによる緊張緩和、という三つの領域に整理することができる。このような形での整理の仕方、あるいは「デタント」の分類は、ヨーロッパ以外の地域の「冷戦」（や米ソ間の「デタント」）にそのまま当てはめることは難しいかもしれない。それゆえに、このような整理に基づいて語ることができること自体が「ヨーロッパの冷戦」の特徴とすることにもなるだろう。

さらに、二つの「陣営」と三つの「デタント」を組み合わせることで、「ヨーロッパの冷戦」の独自のダイナミズムの存在を見いだすことができる。例えば、東西間の緊張緩和を求めると、それぞれの陣営内で軋轢が生じ、陣営内の結束を重視すると、東西対立につながるというように、東西関係と陣営内国際政治が連動したヨーロッパの冷戦のダイナミズムは、やはり他地域には見られないものであろう。ヨーロッパ諸国の指導者の中には、東西対立を乗り越えようと試みる者もいた。だがそれは、必ずと言って良いほど同盟国から不信の目で見られた。また、緊張緩和を目指す試みはしばしば、同時に相手陣営を切り崩すという狙いも込められていた。相手陣営もまたそれを認識し、警戒心がもたれた。とりわけ経済面での相手陣営との関係の深化は敵への依存することを意味するとも見なされ、それを戒める言動もしばしば米ソ超大国からなされた。自陣営の自律の確保と、陣営間の緊張緩和は相反するところがあったのである。

そのような中、CSCEに象徴される多国間枠組みでのデタントは、東西双方が陣営の結束を維持しつつ、東西間の緊張緩和を模索する試みだったと解釈することができる。両陣営はそれぞれ、複数の領域に関して緊密に協議しつつ相手陣営との妥協点を模索した⁴⁸。そうすることで、自陣営が分断される可能性を回避したのである。

ではヨーロッパ冷戦の終わりはどのように語りうるのか。『ヨーロッパ冷

48 CSCEに参加したヨーロッパの中立諸国も独自のグループを形成し、ヘルシンキ最終議定書をまとめ上げる上で重要な役割を果たした。Thomas Fischer, *Neutral Power in the CSCE: The N+N States and the Making of the Helsinki Accords 1975*, Nomos, 2009.

戦史』では、東西両陣営やヨーロッパ各国が、様々な「デタント」政策を通じて、それぞれにとって望ましい「安定」をめぐる対立し続けたが、最終的に東側陣営の方が陣営を維持しつつ安定を追求することができなくなっていったと論じる。ここではよく知られる1980年代末から90年代初頭のプロセスを詳述はしないが、特に経済が悪化し西側の支援を必要としたハンガリーが「鉄のカーテン」を解放し、東ドイツ人がオーストリア経由で西ドイツへと脱出できるようにしたことが、連鎖反応的な東側陣営の崩壊の引き金になったとの見方を提示した⁴⁹。かくして、戦後ヨーロッパを特徴付けた「地域冷戦」は終焉へと向かっていったのである。

おわりに

グローバルに視野の広がった「冷戦」をどう語れば良いのだろうか。答えはむろん一つではないだろう。だが、米ソ超大国によるグローバルな関与・介入という側面と共に、世界各国・各地域の主体性について語るという傾向は顕著なものとなっている。それら全てを一つにまとめ上げることは容易ではないが、ウェスタッドやルーチの大著はそれが不可能でないことを示している。

両者の著書は共に、明示的・暗示的に「地域冷戦」についても語っている。ウェスタッドは「世界史」としての冷戦を語ることに主眼を置いているため、地域固有の「冷戦」について厳格に語られているわけではない。ルーチは「サブシステム」としての「地域冷戦」、そして冷戦と呼ばれる時代のアジア、中東、ヨーロッパの国際関係の展開を意欲的に論じている。一人の歴史家が異なる地域について（さらに地域間の相互作用をも含め）、これほど広い視野で描いていること自体驚異的である。しかし子細に見たとき、「アジア冷戦」、「中東冷戦」、「ヨーロッパ冷戦」が結局の所、それぞれ何であったかが明確に論じられてはいない。

一人の歴史家ができることには常に限界がある。だが、ナショナル・ヒス

49 付言すれば、『ヨーロッパ冷戦史』では、1980年代末のポーランドの政治体制の変化は、東側陣営を崩壊させる最初のドミノではなかったとの立場をとっている。

トリーや一国外交史を超えるアプローチが提唱されて久しくもある。それゆえに、冷戦史研究におけるいわば「中間理論」としての「地域冷戦」の議論をさらに深めていくことは一定の意味があるだろう。『ヨーロッパ冷戦史』では、ヨーロッパ冷戦の語り方の一例を示した。別のヨーロッパ冷戦の語り方もあり得ることは、言うまでもない。文化や社会の変化、トランスナショナルな人々の交流などに注目して描くやり方もあるだろう。

ヨーロッパ冷戦の語り方が、そのまま別の地域に当てはめられはしないだろう。だが「地域冷戦」のようなものはヨーロッパ地域においてしか明確な形で語れないのではないかという批判を意識して、本稿ではラテンアメリカの冷戦を論じる試みを紹介した。一次史料に基づく研究の蓄積は、国・地域においてまだ大きな差がある。ヨーロッパ地域の冷戦研究が相対的に分厚いことは確かであり、その分だけヨーロッパ冷戦を論じやすいところはある。それでも、今後もさらに様々な国・地域の冷戦史研究が発展していく中で、ヨーロッパ以外の地域の「地域冷戦」の解像度が上がり、より明確な議論ができるようになる可能性はある。本稿では、そのための作業仮説として、「○○（地域名）における米ソ冷戦」(the Cold War in ○○)、「○○の冷戦」(○○'s Cold War)、「非冷戦」という三つの区分の仕方を提示した。

冷戦史研究者の間では冷戦とはグローバルなものであったとの認識は共有できていても、より一般的には、依然として冷戦は米ソ超大国の間の対立であるというシンプルなイメージが存続しているかもしれない。しかし、そのような単純な理解のまま「冷戦後」や「ポスト冷戦後」を論じて良いだろうか。「冷戦」を所与のものとして考えたり、外部要因の一つとして扱うことは、そのような単純な冷戦理解を再生産することにもなるだろう。「グローバルな冷戦」や「複数の冷戦」の理解を深めることは、多様な国がいつそう重要性を増した今日の世界について考える上でも重要な歴史の基礎知識になるはずである。複雑なものを伝えることは容易ではない。それでも、あるいはそれゆえにこそ、「冷戦」の語り方について今後も議論を発展させていくことが求められる。複雑なものを過度に単純化せず、しかし相手に伝わる語り方を模索し続けなければならない。

付記

本稿は、2024年11月に札幌コンベンションセンターにおいて開催された日本国際政治学会2024年度研究大会の部会8「『冷戦』の語り方」のために執筆したペーパーに若干の加筆・修正を施したものである。同部会のセッションにおいて討論者を務めていただいた鳥潟優子先生と白鳥潤一郎先生からは貴重なコメントを戴いた。記して感謝したい。